

ひきこもり支援における共同生活型支援に関する基礎的検討

大谷大学 岡部 茜 (8265)

[キーワード] ひきこもり、居住、共同生活型支援

1. 研究目的

1990年代ごろから「ひきこもり」が社会的に注目を集めるようになり、ひきこもる人々に関して様々な議論がなされてきた。ひきこもり支援に関しては居場所や仲間の重要性、就労や仕事づくりに関する取り組み、アウトリーチにおける要点、ピアによる支援の意義、支援ネットワークづくりの必要性、そしてそうした支援の課題など幅広く議論されてきた（長谷川 2006、竹中 2010、山本 2013、田中 2014 など）。また近年では、手紙という手法の取り組みが検討されるなど新たな実践の開発及び検討が進められている（田中 2017）。

これに対して、ひきこもり支援において住まいに関する支援は主要な論点にはならなかった。関係する制度としては 2005 年に開始した若者自立塾事業の宿泊型が、3～6 ヶ月程度の期間で若者たちが共同生活をしながら就労を目指すものとして実施されたものの、2010 年に廃止され、その評価もあくまで就労支援としての文脈で主に議論されてきた。それは、対象とされたひきこもりやニートといわれる人々が家族扶養を一定期待できると想定されたことも影響しているだろう。

しかし、家族と同居可能であっても、家族との同居がひきこもる若者にさらなる葛藤を生じさせることもある。実際に若いホームレスには、無職状態から家族との関係を悪化させてホームレス化した者もいることがホームレス支援団体の報告などから読み取ることができる（ビッグイシュー基金 2010）。そのため、ひきこもり支援にとっても家族との同居以外の住まいの選択肢の保障に関する議論が必要になるのではないだろうか。しかしながら現状では、そうした住まいに関する支援については整理がなされておらず、どのような取り組みが実際にあるのか、その課題はどのようなものであるかも不明瞭である。したがって、本報告ではひきこもり支援における住まいを軸とする支援に関して、これまでどのようなものが取り組まれ、どのような課題や有効性が考えられるのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

住まいを軸とする支援としては、(1)金銭補助などで住まいの獲得を支援するアプローチ（例えば、一時的であるが生活困窮者支援法における住宅確保給付金など）と(2)一つの建物に数名で住み込み共同生活に取り組む支援するアプローチ（以前の若者自立塾など）がある。また何を保障するかという視点に立てば、(a)居住空間を保障するハード面のアプローチと(b)食事や衛生管理、対人関係などの生活面を支援するソフト面でのアプ

ローチに分けることも可能である。金銭的補助による住まいの獲得支援は主にハード面の支援となり、共同生活での支援はハード面とソフト面の両方へのアプローチとなる。本研究ではひとまず、ハード面とソフト面の両方へのアプローチとなる共同生活型支援について検討することとしたい。本研究では、文献や実践団体の資料、シンポジウムなどでの団体の報告および資料の検討という方法をとる。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守している。

4. 研究結果

- *課題： 共同生活型の支援において、家賃を含めた金銭的負担は大きな課題である。団体資料等で見ると多くの団体は月額 10 万円前後、あるいはそれを越える金額の負担が必要であり、この金額を支払うことのハードルは非常に高い。ただし、助成金や制度を利用し 10 万以下におさえている団体もある。また、家族が入居を希望した場合には家庭訪問をおこなう団体があり、そうした家庭訪問の暴力性は検討の必要があると考えられる。
- *有効性： 共同生活型の支援において特に可能となるものの一つが、生活への支援であると考えられる。生活を一定期間共にすることによって、わかる側面があることが実践者の記録（たとえば、安達ら 2008）から読み取ることができる。また、家族との距離をとることができること、環境の転換が図られることなども考えられる利点である。

5. 考察

本人が合意する住まいを軸とした支援は、金銭的問題を乗り越えることができるならば、家族と距離を置くことや今の生活環境から離れることが可能となる仕組みでもある。また、生活リズムの安定や衛生管理など最低限自分で生活をしていくことができる力を獲得することも可能である。ただし、そうした生活スタイルが支援者の「常識」によって大きく介入されてしまう恐れもある点には留意する必要があるだろう。そうした点への介入の暴力性がいかに自覚されるかも、住まう支援においては重要な点となるのではないかと考える。

文献

- 安達俊子・安達尚男（2008）『ひきこもりの若者と生きる』高文研。
 竹中哲夫（2010）『ひきこもり支援論-人とつながり、社会につなぐ道筋をつくる』明石書店。
 田中敦（2014）『苦労を分かち合い希望を見出すひきこもり支援』学苑社。
 田中敦（2017）「手紙を活用したひきこもり地域拠点型アウトリーチ実践」『社会福祉研究』（129）, 78-84。
 長谷川俊雄（2006）『社会的ひきこもり』支援の現状と課題『社会福祉研究』8, 17-37。
 山本耕平（2013）『ともに生きともに育つひきこもり支援』かもがわ出版。

[本研究は JSPS 科研費 18K13012 の助成を受けたものです。]